

## 雜 錄

### ネクロロジ

エミール・モーエルソン

(一八五九—一九三三年)

自然科学と哲學との密實な結合、一の他への常に活潑なばかりきかけば、フランス學界の顯著な特色である。それは科學の歴史の周匝な研究を生むと共に、深化して科學の哲學的精緻な批判に到る。我々は、既にテカルトに見られる科學・哲學的精神の繼承者造の名を容易に想起することが出来るであらう。この傳統的精神から生れた科學批判は、前代に於てはポアンカレとデュアーンによつて代表されてゐたが、現代に於ては、昨年十二月三日巴里で長逝を惜まれたエミール・モーエルソンに於てその頂點に達してゐた。彼はポーランドのルアリン（當時はロシア領）の生れ、ユダヤ系であるといはれる。幼少の頃、ドイツに移つて、中等教育を受け、大學生活はハイデルベルク等で送り、専攻は化學であつた。一八八二年來パリに定住、化學技師、通信員等を職とした。一八八四年頃、化學の歴史に興味を持ち、更に自然科学一般の哲學的研究に進み、一八八九年以來この方面に専念したといはれる。彼の學統は純粹にフランス的であるとはいへないが、その學的創造は、現代フランスの科學の哲學に深い根を張つてゐる。尤も、彼の最初の哲學的著作「同一と實在」は二十五年前のものであるに拘

らず、彼の名は國外にはあまりに傳へられてゐなかつた。ユーベルレークの哲學史の最新版（一九二八年）すら、僅に追補の部に數行を與へてゐるに過ぎず、我が國の辭典の類には、最近のものにさへ、彼の名は全然見出されなかつた。併し、一九三一年「思惟の歩み」と題する大著の出版の頃から、この科學哲學者の名は諸國に喧傳され、「同一と實在」の英譯、獨譯も多くの讀者を得るに到つた。

「同一と實在」は、第一に科學的・實證主義的認識論を克服せんとする。彼の専門の化學の領域に於ても、經驗論は學問的に維持されるべき立場ではない。所謂經驗的な法則科學もア・プリオリな諸要素に浸潤してゐる。科學的な研究の全體は、意識的にせよ無意識的にせよ、諸假説の影響の下に立つてゐる。第二に、懷疑的現象論、科學的・不可知論的實證主義に反對して、形而上學的・實在論的認識論を樹立せんとする。自然科學的な理論と自然法則とは、經驗に與へられたまゝの素材の映寫ではなくして、精神の創造である。經驗的・實證的法則科學は絶えず同一性と恒常性との諸概念を使用してゐる。自然研究者は、二つのア・プリオリな原理、合法則性と因果性とに従屬してゐる。科學的思惟は、ア・プリオリなものとはア・ポストオリなものから成立つてゐる。前者は、我々の使用する諸假説であり、それによつて自然の統一は成立する。所謂嚴密科學も藝術的創造である。何となれば、科學は、正確にいへば、經驗的ではなくして、同一律の自然への累進的適用であるから。同一律こそ思惟の最も重要な根本的原理であり、この原理の科學への干與は、因果律確立の努力によつて

表される。即ち時間的に異つたものから「同一」を見出すことが、即ち原因と結果とを相等しとすることが、因果性の説明である。従つて、科學的法則は觀念的構成であり、自然の秩序の悟性によつて映された相似像である。自然の法則は、我々がそれを構成しなかつた前は、存在せず、又我々によつて高次の法則に融解された後も存在しない。併し、科學的法則は、實在を表現するけれども、それに於て完全であることは出来ない。我々の悟性と實在との一致は認められるけれども、それはたゞ部分的にのみ可能である。かくて、メーエルソンは、獨斷論と經驗論的な懷疑論との中間に立つといはれる。

第二の著作「科學に於ける説明(一九二一年)」は、一方科學的・實證主義的認識論を斥けると共に、他方自然科學の説明に對して形而上學の權利を擁護せんとする。自然科學は本質的に實在論的であり、自我を超越する實在、物の概念を缺くことが出来ない。科學の目的は單なる記述ではなくして、説明であり、法則の確立である。科學の説明の目標は、原因と結果との同一を發見し、總ての問題を幾何學の問題に還元することではなければならない。併し、それに完全に到達することは不可能であり、科學の合理化には、常に非合理的なものが殘存する。形而上學的要求は總ての哲學を貫いてゐる。「先づ生活し、次に哲學する」のではなくして、「生活することが哲學すること」でなければならぬ。因果律は研究の單なる假説ではなくして、それに對應するものを、自然そのものの最も深い本質に於て見出す。こゝに、ゲーテのいつた如く、

學校で教へられるやうな形而上學ではなくして、「物理學前にありし、共にあり、又後にあるだらう形而上學」が要求されるのである。

「相對論的演義(一九二五年)」は相對性原理に對する贊否を述べたのではなくして、この理論の解釋と説明とによつて、彼の哲學を確めようとするのである。昨年公にされた「量子物理學に於ける實在と決定論」も亦同一の意圖を有するものと見られる。相對性理論は、現象論と實證主義的相對主義とに死の宣告を與へ、物理學者が實在にまで連れ戻す。パラドクスを冒していへば、相對性理論の説く實在は存在論的絕對者であり、眞の即自的存在であり、實在の非相對性である。それに於ては、事象そのものの差異が同一に還元されるのみならず、觀測者の相違も同一に還元される。それは、物理的なものを超空間的なものに還元し、合理化せんとする幾何學的説明である。それは、時間に於ける生成・變化を、その否定によつて、純粹に空間的な諸概念に還元することによつて説明しようとする。アインシュタインの説く時間、空間は、カッセルのそれをカントの時空論に歸しようとする努力に拘らず、直觀的形式ではなくして、物自體に屬し、自我から解き放たれ、客觀的なものの本質を構成してゐる。ユークリッドの空間は、人間に固有なものであるが、屈曲と、ひだのある空間は物に屬する。それは實際に、又文字通りに物自體である。相對性理論は先驗的觀念論でも、現象論的實證主義でもなくして、一つの形而上學的體系であり、科學的數學主義であり、超數學であり、汎數學

主義である。併し、この差別を同一に還元しようとする相對性理論も、自己とは異質的な存在を完全に消失せしめることは出来ない。

「思惟の歩み」(一九三一年)の主旨は、「同一と實在」以來述べたものと同一である。ベルグソンもいつてゐるやうに、哲學の諸體系も一つの觀念の周圍を廻轉してゐるのである。科學者も常識人と同じく、自己の研究の過程を知らず、その發見は殆んど無意識的になされてゐる。その心理學的過程は、ヘルムホルツが示した視覚印象の如く、多くの推理をコンテンスして含んでゐる。それをつつと取出して吟味するのが科學の哲學の目的である。

科學的推理の原理は所謂ア・プリオリ的なものである。それは人間の本性に固有なものであり、性質的變化の中に同一を維持し、時空的變化を通じて恒常的である。差別を同一に還元することが、科學的認識の目的であり、その完全な範例は數學の方程式に於て見られる。科學は行動のために存するのではなくして、現象の説明を目的としなければならぬ。説明とは、前件と後件との同一を見出し、「合法則性」を確立することである。

科學に於けるア・プリオリ的なものは、時間の除去を要求する。この理想は、既に、バルメニデースの宇宙觀に於て現れてゐるが、アインシュタインの相對性理論も、物理的實在の時空的統一への還元である。併し、時間、變化、新しき性質等は自己同一者の本源的な單一性を破壊する。相對性の理論に於ても、時間の不可逆性は、熱力學の第二法則と關連し、數學的物理学の合理的な宇

宙に非合理的なものを導入する。人間の思惟は、科學的である否かに拘らず、常に生成に於てあり、その成果は決して終極的であることはなく、常に新しい研究への出發點をなす。物理學者は物理学を數學に還元しようとするが、總てのものは、その根柢から數學化されることを拒む。理性と自然との一致は部分的であり、それに置かれる制限は豫見され得ない。人間の認識は絶えず眞理に近づきながら、常に實在から無限に隔つてゐる。この一見絶望的な状態にありながら、本質的に近づき得ない目標への努力を、人間の尊嚴が彼に強ひるのである。

以上がこの書に於て展開されるべきメーエルソンの主旨である。本書は全三冊、千頁を超える大部の書であり、初の二冊が本文で四巻に分たれ、第三冊は註釋及び索引に充てられてゐる。本書の内容に關しては、岩波講座「哲學」に於て、河野與一氏が「現代佛蘭西哲學」(下)五九一七一頁に、精細に述べられてゐる。尚ほ、メーエルソンの「科學哲學」一般に就いては、「日佛文化」新第五輯四三一五一頁に、桑木或雄氏の紹介がある。

Identité et Réalité, 1908. L'explication dans les sciences  
2 tomes, 1921. La distinction relativiste, 1925. Du cheminement de la pensée, 3 tomes, 1931. Réel et déterminisme dans la physique quantique, 1932.

ハンス・ファイヒンゲル

(一八五二—一九三三年)

一八五二年九月二十五日テュービンゲン附近ネーレンに生れ、七七年ストラスブルク大學の私講師となり、八四年ハルレ大學の員外教授、九四年正教授に進む。一九〇六年眼疾のため隱退し、晩年は殆んど失明してゐた。一九三二年には生誕八十年を祝はれ、記念論文集の刊行を見たが、昨年十二月十九日死去。

彼の學的活動は二つの方面を有する。一はカント文獻學者としてであり、他は「かのやうにの哲學」の提唱者としてである。併し、彼自ら、終生カントの忠實な後繼者を以て任じ、その體系もカント哲學の、少くともその一面の、徹底であると信じてゐた。一八九六年カント研究を創刊し、一九〇四年カント協會を創立し、近年までその主宰者として、カント復興に重要な貢獻をなしてゐる。

彼はフリードリッヒ・アルベルト・ランゲの直接の後繼者であり、その哲學を獨特の仕方で改變し、進展し、終生その影響の下にあつた。既に一八七六年の著作「ハルトマン、デューリング、ランゲ」に於て、前二者の哲學は、觀念論的、唯物論的、獨斷論的形而上學のもえさしであり、後者の哲學こそ、正に事態の要求する立場であるといつてゐる。

一九一一年「かのやうにの哲學、觀念論的實證主義に基ける、人類の理論的、實踐的、宗教的假作」と題する大部の書がアノニームで現れた。編者として、當時まで純粹のカント學徒として知られてゐたフアイヒンゲルの名が記されてゐた。併し彼は、第二版からは、公然と著者として名乗つてゐる。それは彼の過去二三

十年間に於ける思索の産物であり、大部分に既に書下されてゐたのである。

カントの構成主義的認識論を繼承して、認識は實在の模寫ではなくして、主觀の構成である。併し、その所謂主觀とは、純論理的な認識主觀ではなくして、個人的乃至は種族的な生命主觀である。我々の總ての認識は、絶對的な眞理價值は有せず、生活のための闘争の價值ある手段であるに過ぎない。外界を支配せんがためには、興へられたもの即ち感覺を、範疇によつて加工しなければならぬ。我々は、興へられたものを征服し、秩序づけ、支配するためには、それを物として、屬性を有する實體等々として把握し、それらの假作によつて興へられたものを、いはゞ僞作しなればならぬ。假作とは、一般的にいへば、實際は眞でないのに、眞で「あるかのやうに」に考へられ、そしてそれが我々の生の目的の達成に役立つが如き假定である。所謂、科學の全體も、窮極に於ては、かゝる假作による諸思想の巨大な集積である。たゞ、科學に於てのみならず、形而上學的領域に於ても、道德、藝術、宗教に於ても總ては假作である。我々が存在するかのやうに信じる物、物質、抽象概念、人格、靈魂、時代精神、宇宙、絶對者等々は皆、我々の生の目的を達成せんがために設けられた假作である。そして、眞理とはこの目的に適ふもの、即ち有用なものである。併し、フアイヒンゲルは、自己の哲學に就いて語る際に、「かのやうにの哲學」を所謂「實用主義」から厳しく區別していふ。實用主義は、眞理と效用とを同一視し、或は少くとも後者にその基準

を求めようとすることに對して、彼は、その虚偽であることを確信する諸表象も、我々にとつて理論的にも實踐的にも有用であり、しかのみならず必要缺く可からざるものでさへあり得る、即ちこの意味に於て虚偽も眞理であると主張するに止るのであるといふ。

他方、「かのやうにの哲學」の説く「假作」は、學問的な假説とは區別されなければならない。後者は實在の認識を志し、それに合致するか否かを検証されんことを欲する。これに反して、假作は實在の模寫ではなく、それに合致することを求めない。實在による検証を要しないのみならず、又無限大、無限小、アトム等々といふが如く内的矛盾をさへ包含してゐる。

古人は、論理的矛盾を恐れてゐた。近代人は大膽に幾多の假作をなす點に於て斷然進んでゐる。將來の哲學の課題は、出來得る限り、生の充實に役立つやうな諸假作を立て、勇敢に「かのやうに」行動することである。「かのやうにの哲學」の機關として一九一一年、レイムント・シュミットと共力の下に、「哲學年報」を發刊し、その後實證科學者の參加を得て、二五年(第四卷)以後は、テイトテルに「並びに哲學的批評の」といふ名を加へた。(同誌は二九年第八卷を出したが、三〇年「認識」と改題され、今日では科學哲學の専門雜誌として聞えてゐる)

フアイヘンゲルの「かのやうに」の哲學は、「淺薄」の二字を以て批評し去られてゐる。併し、現在我々は、如何に屢々「かのやうに」認識し、行動することを強ひられてゐることか。フアイヘンゲルが「あるかのやうに」考へることをすゝめたものを、彼に從つ

て、信じることが得策である人もあるが、反對にそれ等を「ないかのやうに」考へねばならない人もある。併し、前者も亦、現にあるものを「ないかのやうに」假想することを要求されてゐる。併し、「かのやうに」は、結局、假作であり、「眞理への意志」を缺く、認識の斷念であり、現實の曲歪である。

Goethe als Ideal universeller Bildung, 1875; Hartmann, Dühring und Lange, 1875; Das Entwicklungsgesetz der Vorstellungen über das Reale (Vierteljahrsr. f. wissenschaftl. Philos., Bd. 2) 1878; Kants Widerlegung des Idealismus, 1883; Naturforschung und Schule, 1880; Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft, 2 Bde., 1891-02; Kant, ein Metaphysiker? (Sigwart-Festschrift) 1900; Die transcendente Deduktion der Kategorien (Hym-Festschrift) 1902; Nietzsche als Philosoph, 1905; Die Philosophie in der Staatsprüfung, 1905; Die Philosophie des Als Ob: System der theoretischen, praktischen und religiösen Fiktionen der Menschheit auf Grund eines idealistischen Positivismus, mit einem Anhang über Kant und Nietzsche, 1911; Die Philosophie der Gegenwart in Selbstdarstellung. Bd. II. 1921.

ハインリヒ・マイエル

(一八六七—一九三三年)

一八六七年二月五日ハイデン・ハインに生る。一九〇一年チュー

リヒ、〇二年テュービンゲン、一二年ゲッティンゲン、一八年ハイデルベルクの諸大學の教職を歴任し、二二年ベルリンに轉じて、史家として體系家として獨逸哲學界の一角の指導者であつたが、昨冬その長逝を惜まれた。

彼は先づ傑出した哲學史家であり、我が學界に彼の名が知られてゐるのも、主としてこの方面の業績によつてである。彼の處女作は今も尚ほその部門の權威書といはれる、「アリストテレスのシュロギステイク」(一八九六—一九〇〇年)であつた。特に一九一三年の著作「ソークラテース」は、史家として確乎たる地位を築き上げた。この書は、會つてソークラテースに歸せられてゐた概念の論理的規定の創始を彼に託み、ソークラテースは、アリストテレスに準據する人々の考へるが如く、學問的、殊に論理的な努力を目的としたのではなく、人間を正しき徳にまで導く、最もよき意味の道徳家であつたと主張するのである。このマイエルの新しきソークラテース解釋は、今日に於てこそ、全幅的な支持は得てゐないが、その當時に於ては、誠に劃期的なものであつた。尚ほ哲學史的研究としては、メランヒトン、ラフアーテル、シュトラウスを取扱つた「哲學の境界に」(一九一三年)、並びに晩年の作である「獨逸觀念論の始源」(一九三〇年)がある。

體系家としては、彼自らが新版を出したツクルトの論理學から出發した。彼に於ても論理學は思惟の規範學であつたが、その所謂思惟は、認識し、判斷する思惟のみではなく、その外に存在すると彼が主張する、感情生活、意志生活から生じる思惟をも含

むものである。それ等のエモテイオナルな思惟も、認識的思惟と區別されるべき、獨特の、自立的な統一性を有するといふ。一九〇八年に出た彼の最初の體系的著作「情意的思惟の心理學」は、かゝる思惟の研究に捧げられてゐる。

情意的な思惟は情感的な思惟と意欲的な思惟とに分たれる。情感的な思惟には審美的なものや宗教的なものが、その固有な領域として屬する。前者は對象を現前せしめる表象であるが、その對象に實在性を與へない。後者は、信仰の表象であり、その對象に客觀的妥當性を要求する。次に、意欲的な思惟とは、意欲表象、即ち意志の目的表象である。それは「あり」ではなくして、「あるべし」によつて表される。そしてその主要な領域は法律、道徳、倫理である。從來の論理學が専ら認識的思惟にその對象を限つたのに對して、マイエルによれば、論理學は、思惟一般の規範學である限り、情意的思惟をも包含しなければならぬ。即ち、論理學は、認識的思惟に對してのみならず、又感情的思惟にも規範を發見しなければならない。しかも、論理學の探究する理想並に諸規範は本來的には目的表象に於て考へられるのであり、それらのはたらきは意欲的思惟作用である。従つて、論理學の諸成果はたゞ情意的・論理的妥當性を要求し得るのみである。マイエルの最初の體系的著作は、かくの如き一般的な包括的意味に於ける思惟に心理學的基礎を與へんとするものであつたといふことが出来る。

かゝる立場による、フッサールの現象學批判は一九一四年のア

ロイス・リール記念論文集中の一篇「論理學と心理學」に於て見出される。思惟は、表象以上に或る特殊なばたらきを有するものとは考へないマイエルの立場から見れば、現象學も一つの心理學であるに過ぎず、論理學への豫備學として貢獻するに過ぎなくなる。

同年の著作「歴史的認識」は、當時流行した意味の歴史哲學的研究、即ち歴史學の認識論的研究であるが、當時の哲學に於ける主觀的契機の過重視に反對して、彼の晩年の哲學の特色である實在論的傾向は著しく現れてゐる。この分野に於ても、「情意的思惟」の哲學者は主張する。歴史的認識は、「概念的抽象」ではなくして、「直觀的抽象」である。歴史的認識とは、雜多に於ける統一、特殊に於ける普遍を直觀的に看取り、時代或は個人の特性を記述することであるといふ。

第二の、そして終に生前その完結を見なかつた體系的名著「現實性の哲學」は所謂「理性の哲學」に峻しい對立をなして、現實性に、その奪はれた自然の諸權利を恢復せんとする。

一九二六年に公にされたその第二卷「眞理と現實性」は、我々の認識の進むべき道は、眞理から現實性に到らねばならないといふ確信から現實性の究明に全力を集中する一つの新たな形而上學に論理的基礎を興へようとする。第二卷は「物的現實性」と題され、物的現實性の形而上學を樹立しようとする。昨年公にされたその第一部は「物的世界の實在性」を論じ、先づ物的な現實存在の意味を確めようとする。今日哲學者の間に於ても、かの素材實在論が再び頭を上げかけてゐる。自然科学者は大部分、相不變、物理的實

在論を信じて憚らない。觀念論は斥けられたが、それと同時に、觀念論の教誨も見失はれてゐる。實證主義的な、觀念論的な、實在論的な眞理觀、それらの總ては、嚴密な批判に堪へない。認識作用の精細な分析によつてのみ、我々は現實に就いての一つの新しい反省に到る。超越的所與と、それを物的實在ならしめる判斷との間に因果關係を考へることは許されない。物的實在を構成する判斷は、我の思惟ではなく普遍的な思惟であるが、我から全く離れたものではなく、その中に我の判斷が内在してゐる。如何なる知覺判斷もかゝる普遍的判斷を根底に有し、それに對象を規定する諸形式、即ち範疇は依有してゐる。彼の立場は超越論的現象論であり、そのみが、現實性にその奪はれた權利を完全に恢復することが出来る。そして彼は續刊を約束して果さなかつた第二部「物的世界の構造」に於て、その完全な證明を見出さんとしたのである。

Die Syllogistik des Aristoteles, 3 Bde., 1893-1900 ; Logik und Erkenntnistheorie (Sigwart-Festschrift), 1900 ; Psychologie des emotionalen Denkens, 1908 ; An der Grenze der Philosophie (Mitschnelton, Lawater, Strauss), 1909 ; Sokrates Sein Werk und seine geschichtliche Stellung, 1913 ; Logik und Psychologie (Riehl-Festschrift), 1914 ; Das geschichtliche Erkennen, 1914 ; Philosophie der Wirklichkeit, I : Wahrheit und Wirklichkeit, 1924 ; Die Anfänge der Philosophie des deutschen Idealismus, 1930 ; Philosophie der Wirklichkeit, II : Die Realität der physischen Welt, 1933.

## 新刊書目

- Schmidl, W. & Stählin, O.:—Gesch. d. griech. Literatur. Tl. 1: Die klass. Periode d. griech. Lit., Bd. 2: Die griech. Lit. in d. Zeit d. attischen Hegemonie vor d. Eingriffen d. Sophistik. (Handbuch d. Altertumswiss., Abt. 7, Tl. 1, Bd. 2) München: Beck, XII, 781 S. M. 28.00.
- Braun, M.:—Griech. roman. u. hebraist. Geschichtsschreib. (Frankf. Stud. z. Rel. u. Kultur d. Ant., Bd. 6) Frankfurt a. M.: Klostermann, 121 S. M. 6.50.
- Capelle, W.:—Die griech. Philos., 3: Vom Tode Platons bis zum Eklektizismus im I. Jahrh. v. Chr. (Gesch. d. Philos., II, 2) Bln. u. Lpz., de Gruyter, 158 S. M. 1.62. (Sammlung Götschen, 859).
- Alengel, E.:—Eros, Wertverwirklichung u. Dialektik in ihren Ansätzen bei Platon. (Diss.) Dresden: Rüsse, 74 S. M. 3.00.
- Karpp, H.:—Untersuchungen z. Philos. d. Eudoxos v. Knid. s. (Diss.-Marburg) Würzburg: Triltsch, 51 S. M. 2.50.
- Aristotele:—De la génération et de la corruption. Tr. nouv. avec notes par J. Tricot. Paris: Vrin, VIII, 192 pp. 25 frs.
- Schmidl, H.:—Die Anthropologie Philos. v. Alexandria. (Diss.-Lpz.) Würzburg: Triltsch, 179 S. M. 4.00.
- Krakowski, Ed.: Plotin et le paganisme religieux. (Les Mœurs de la pensée religieuse, 3) Paris: Denoël & Steele, 20 frs.
- Verwiche, W.:—Welt und Zeit bei Augustin. (Forschungen z. Gesch. d. Philos. u. d. Pädag., Bd. 5, Heft 3) Lpz.: Meiner, IV, 86 S. M. 5.00.
- Hofmann, F.:—Der Kirchenbegriff d. hl. Augustinus in seiner Grundlegung u. in seiner Entwicklung. München: Hueber, XXX, 324 S. M. 15.50.
- Thomas Aquinas: On the Power of God. (Quaestiones Disputatae de Potentia Dei) Bk. 2: QQ. IV-VI. Lit. tr. by the Engl. Dominican Friars. Lond.: Burns Oates, 7s. 6d.
- Destrez, Jean:—Études critiques sur les oeuvres de saint Thomas d'Acquin d'après la tradition manuscrite. Tome I. Paris: Vrin, 226 pp. 35 frs.
- Gmür, H.:—Thomas v. Aquino u. d. Krieg. (Beiträge z. Kulturgesch. d. Mittelalters u. d. Renaissance, Bd. 51) Lpz. u. Bln: Teubner, VIII, 78 S. M. 4.00.
- Platon, J.:—Montaigne et son temps. Paris: Boivin, 30 frs.
- Iwanicki, J.:—Leibniz et les démonstrations mathéma-



tiques de l'existence de Dieu. Paris: Vrin. 178 pp. 30 frs.  
 Toeper, H.:—Denkung u. Wertung d. Kunst bei Schopenhauer u. Nietzsche. Dresden; Rissig. 59 S. M. 4.60.  
 Hirsch, E.:—Kierkegaard-Studien. Bd. I, 1: Zur inneren Geschichte, 1885-41; 2: Der Dichter. Bd. 2: Der Denker, Göttersloh; Bertelsmann XII, 318 u. IX, 395 S. je Bd. M. 13.-  
 Platz, W.:—Ch. Renouvier als Kritiker d. franz. Kultur. (Stud. z. abendlän. Geistes- u. Gesellschaftsgeschichte, 5) Bonn u. Köln: Rührscheid. VII, 128 S. M. 4.20.  
 Krenzlin, G.:—Max Schellers phänomenolog. Systematik. (Stud. u. Bibliogr. z. Gegenwartsphil. s. Heft 3) I.-pz.: Hirzel. XIV, 102. S. M. 3.80.  
 Wind, E.:—Das Experiment u. die Metaphysik. Zur Aufrißung d. kosmol. Antinomien. (Beitr. z. Philos. u. ihrer Gesch. 3) Tübingen: Mohr. XII, 120 S. M. 7.-  
 Behn, S.:—Einführung in d. Metaphysik. Freiburg i. Br.: Herder: XXVI, 327 S. M. 6.50  
 Fischer, I.:—Die Grundlagen d. Philos. u. Mathematik. Ipz: Meiner. VII, 180 S. M. 8.-  
 Fetzler, H.:—Einführung in d. Philos. d. Kunst. (Die Philos. Ihre Gesch. u. ihr System, Abt. 14) Bonn: Hanstein VI, 95 S. M. 3.-

雜 錄

Baeumler, A.:—Aesthetik. (S.-A. aus: Handbuch d. Philos.) München: Oldenbourg. S. 100. M. 4.50.  
 Stenzel, J.:—Philos. d. Sprache. (S.-A. aus: Handbuch d. Philos.) München: Oldenbourg. S. 114. M. 4.80.  
 Schwarz, H. (Hrsg.):—Deutsche systemat. Philos. nach ihren Gestalten Bd. 2: H. Cornelius; Edig. Gesamtdarst; J. Geysor: Dass.; K. Gross: Dass.; L. Klages. Geist u. Leben; H. Rickert: Die Heidelberger Tradition u. Kants Kritizismus. Bin.; Junker & Dümml. 52, 62, 70, 49, 69 S. M. 2. 50, 3.00, 3.30, 2.20, 3.00; Bd. 2 komplett in 1 Bde. geb. M. 14.-  
 Freyer, Hans:—Das politische Semester: Ein Vorschlag zur Universitätsreform. Jena: Diederich. 40 S.  
 Blondel, M.:—Ja pensée. I: La genèse de la pensée et les paliers de son ascension spontanée. II. Les responsabilités de la pensée et la possibilité de son achèvement. Paris: Alcan. Tome I: 60 frs. Tome II: Sous presse.  
 Martain, J.:—Questions disputées: Du régime temporel et de la liberté. Paris: Desoëde de Brouwer. X, 274 pp. 12 frs.  
 Alain:—Propos de littérature (Études sur Valéry, Stendhal; Balzac; Proust; Tolstoï; Goethe; Rousseau; Montaigne; Voltaire; Chateaubriand etc. en 85 propos) Paris: P. Hatmann. 330 pp. 15 frs. (以上服部英次郎輯)